

子規がつくった俳句 その1

子規と漱石

漱石と松山でくらす

明治28年(1895年)8月、子規は松山へ帰ってきました。松山では、子規の親友・夏目漱石が中学校で英語の先生をしていました。2人は漱石が借りていた家で52日間いっしょにくらしました。子規が1階、漱石が2階を使いました。

このころの
2人が作った
俳句だよ。



桔^き梗^{ぎょう}活^い
し ば け て
書^{しょ}ば 齋^{さい}く 哉^{かな}
子 仮^{かり}
規 の



▲子規 28才

愚^ぐ陀^だ
主^{ある}人^{じん}佛^{ぶつ}
冬^{ふゆ}籠^{ごもり}の は
漱 名^な
石 なり



▲漱石 29才

ぐ だ ぶつあん ねっちゅう
愚陀佛庵で俳句に熱中

漱石の下宿には、子規に俳句を教えてもらおうと、たくさんの方がやってきました。「松風会^{しょうふうかい}」という会の人たちです。この会は、松山で俳句を作る人たちが集まって作ったものです。子規たちは1階でたびたび句会(俳句を作る会)を行い、熱中しました。

そのうち、漱石もいっしょに俳句を作るようになりました。漱石は俳句を作るときに「愚陀佛」というペンネームを使っていたので、この家は「愚陀佛庵^{ぶつあん}」と呼ばれたのです。

展示室で チェック! 愚陀佛庵をのぞいてみよう



▲子規と漱石がいっしょにくらした愚陀佛庵の1階を復元しています。

句会のほかには どんなことをしたの？

病気だった子規は、体力をつけようと、漱石や松風会の人たちといっしょに松山市内のあちこちへ出かけました。お寺や温泉に行ったり、芝居しばいを見たりしています。そして、この時作った俳句などをまとめた「さんざくしゅう散策集」という本を作りました。



▲むかしの道後温泉

最後の旅

(え)
「柿くへば…」

子規は松山で約2か月くらした後、東京へもどることにしました。東京へ向かう途中とちゅう、大阪や奈良に立ち寄りよりました。奈良では、東大寺や法隆寺などを見物しました。

そして、「柿くへば鐘(え)かねが鳴るなり法隆寺」という俳句を作りました。子規が作ったたくさんの俳句の中でも、特に有名な俳句です。

歩くのが大変

子規はこの旅の途中ちし、腰いたが痛くて歩くのが大変でした。「リウマチかもしれない」と思った子規は、薬をもらって、旅を続けました。

しかし、次の年、医者にみてもらいと、せきつい脊椎力リエスという病気だと言われました。これは、けつ結核菌かくきんが背骨せぼねの中に入って骨を溶かしてしまうという大変な病気です。この後も病気は悪くなり、子規は起き上がることもできなくなります。

この松山から東京へもどる旅が、子規にとって最後の旅となりました。

最後の帰郷ききょう

子規は、16才で東京に出たからたびたび里帰りをしていますが、この後帰ることはありませんでした。これが最後の里帰りだったのです。



展示室で チェック！ 子規の俳句



柿かきくへば(え)鐘かねが鳴るなり法隆寺ほうりゅうじ

子規

